

4 年齢階級別の自殺の状況

年齢階級別の自殺者数について人口動態統計によれば（第1-6図）、男性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が、60年前後に35～54歳の階級が、平成10年以降に45～64歳の階級がそれぞれ大きな山を形成している。

年齢階級ごとにそれぞれみると、15～24歳の階級は昭和30年前後に非常に大きな山を形成した後は、大きな変動はみられない。25～34歳の階級は、昭和30年前後、50年代、平成10年以降に山を形成している。35～54歳の階級は昭和60年前後と平成10年以降に山を形成しているが、45～54歳の階級にあっては15年以降は減少傾向にある。55～64歳の階級は、昭和50年代末から増加傾向となって、平成10年に急増し、以後高い状態で推移してきたが、近年は減少傾向にある。65～74歳の階級は、同じく10年に急増し、それ以降増加傾向にある。75歳以上の階級は、ゆるやかな増加傾向にある。

女性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が山を形成した後は、男性のような大きな変動はみられない。年齢階級ごとにみると、15～24歳の階級は昭和30年前後に大きな山を形成した後、減少傾向で推移している。25～34歳の階級は昭和30年前後にやや小さな

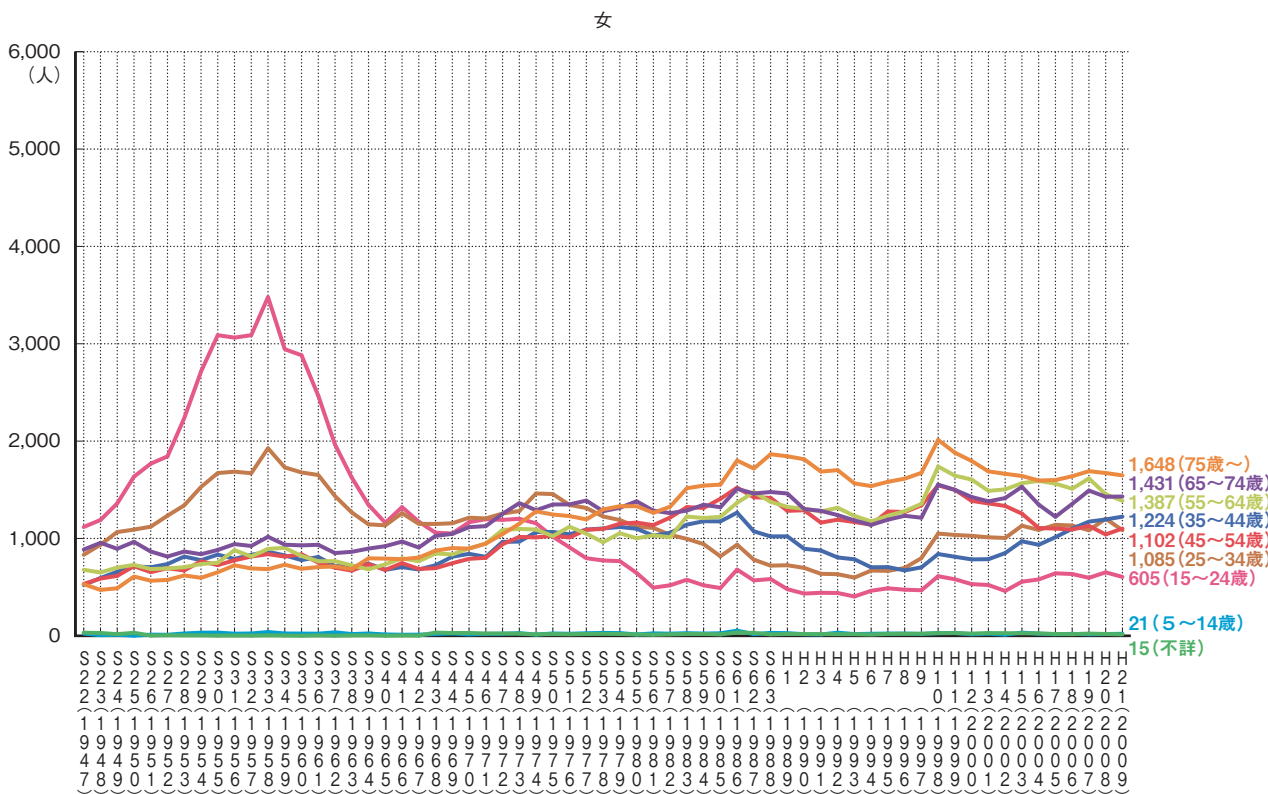
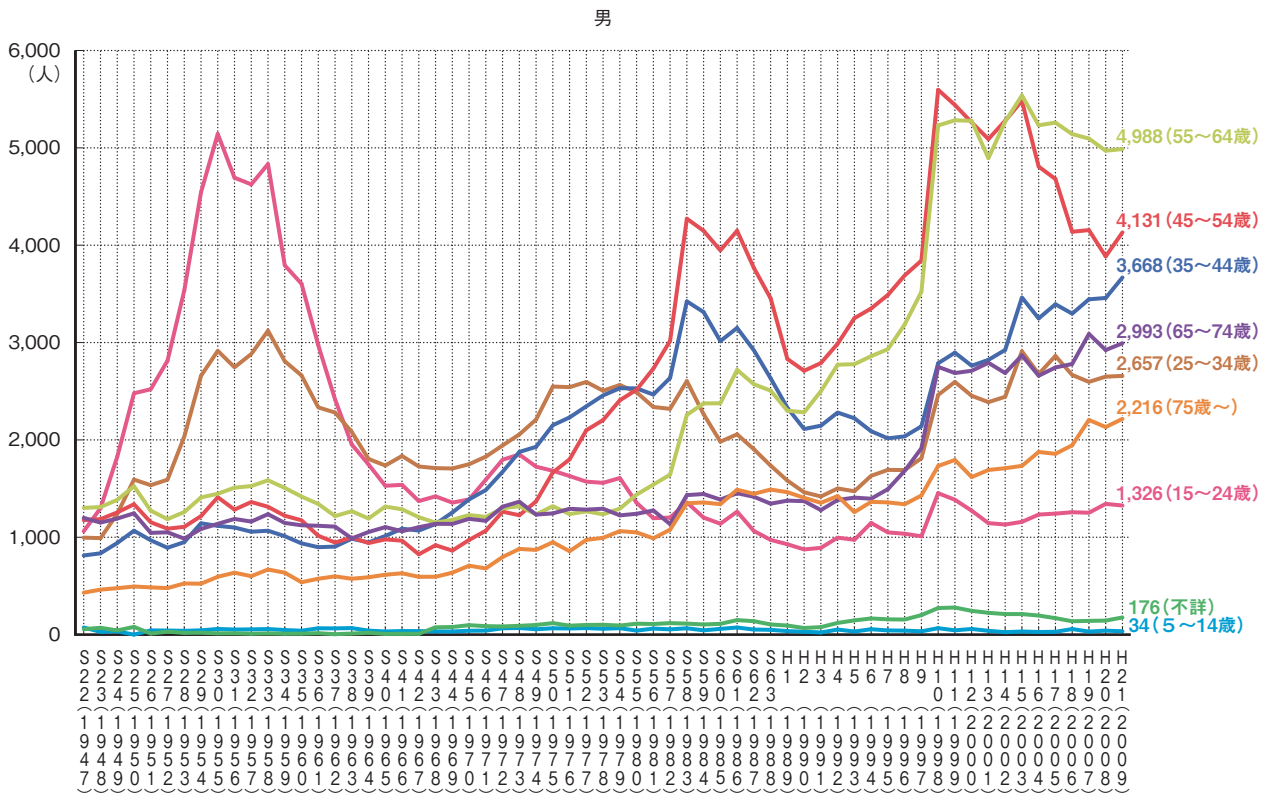
山を形成した後、減少傾向で推移したが、近年増加傾向に転じ、平成10年にはやや大きく増加した。35歳以上の各階級に関しては、総じてあまり大きな変動は見られないところであるが、昭和50年代までは、ゆるやかな増加傾向が続き、35～44歳の階級にあっては、60年代から平成8年までは減少傾向が見られたが、10年には各階級ともやや大きく増加した。

世代別の自殺の状況をみると、青少年（30歳未満）の自殺者数は、近年、全体の10%台前半のほぼ横ばいで推移している（第1-7図）が、自殺死亡率はやや増加傾向にある（第1-8図）。

中高年（30～64歳）の自殺者数は、昭和58年に急増した後、平成10年に再び急増し、以後、高い水準のまま推移している（第1-6図、第1-9図）。平成10年は、50歳代の男性の増加が著しい。また、中高年の自殺死亡率をみると、自殺者数と同様に高い水準が続いている。女性は、ほぼ横ばい傾向にある。

高齢者（65歳以上）の自殺者は、平成10年以降ほぼ横ばい又はゆるやかな増加の傾向があるものの（第1-10図）、高齢者人口そのものの増加により、全体の自殺死亡率は、低下傾向を示している。

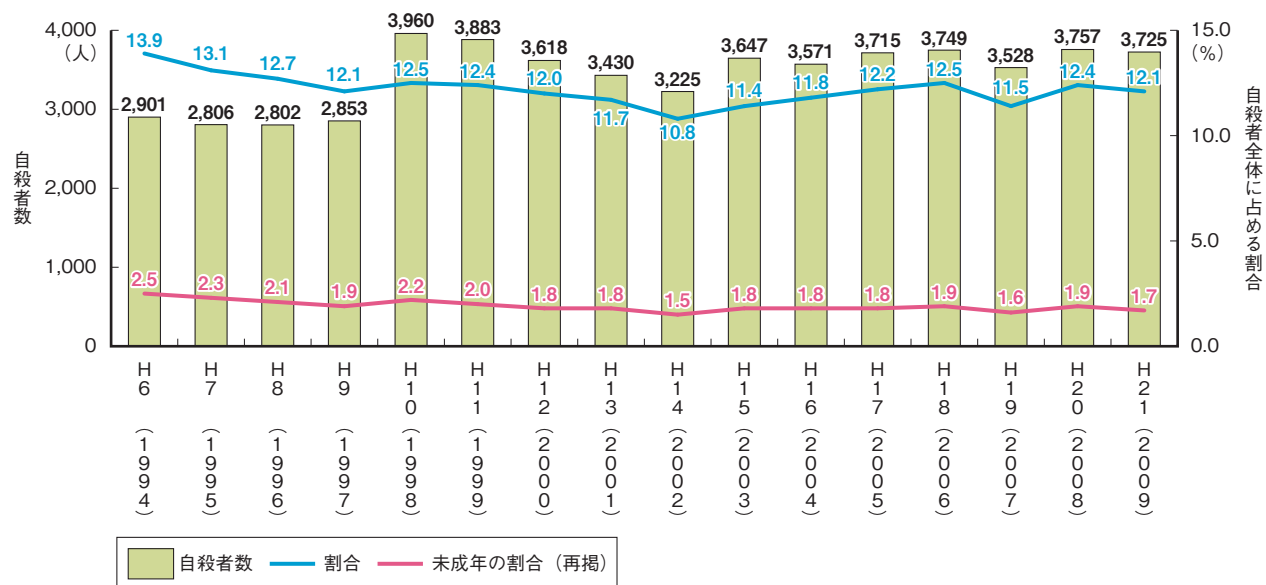
第1-6図 年齢階級別（10歳階級）の自殺者数の長期的推移



5～14歳 15～24歳 25～34歳 35～44歳 45～54歳 55～64歳 65～74歳 75歳～ 不詳

資料：厚生労働省「人口動態統計」

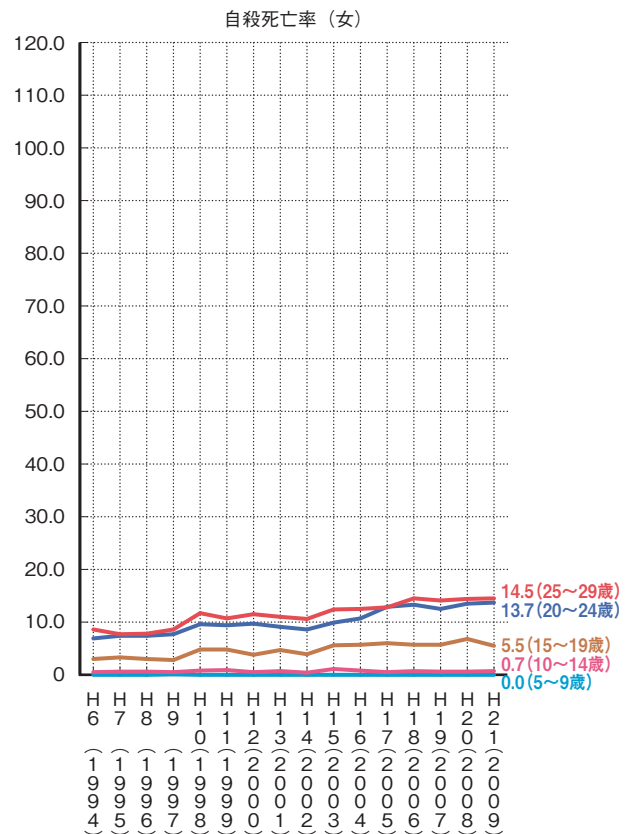
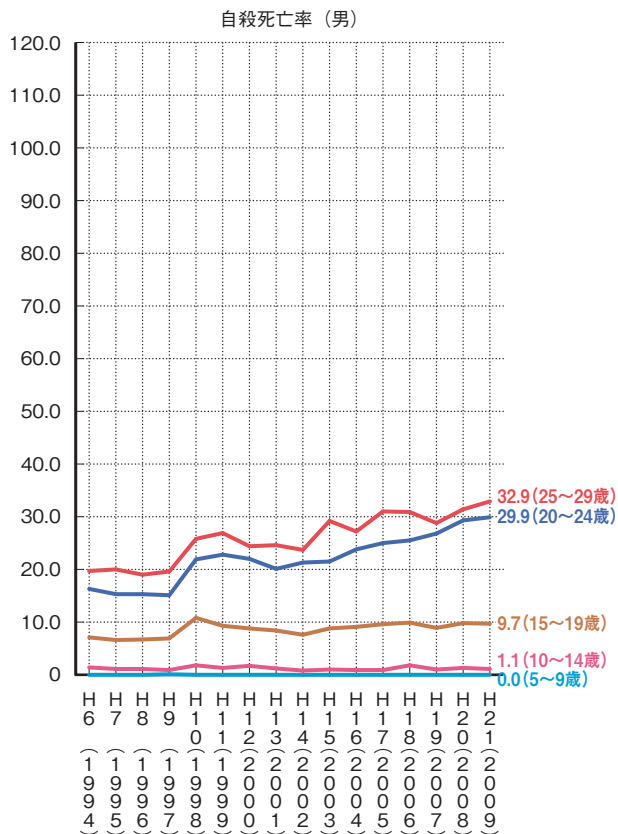
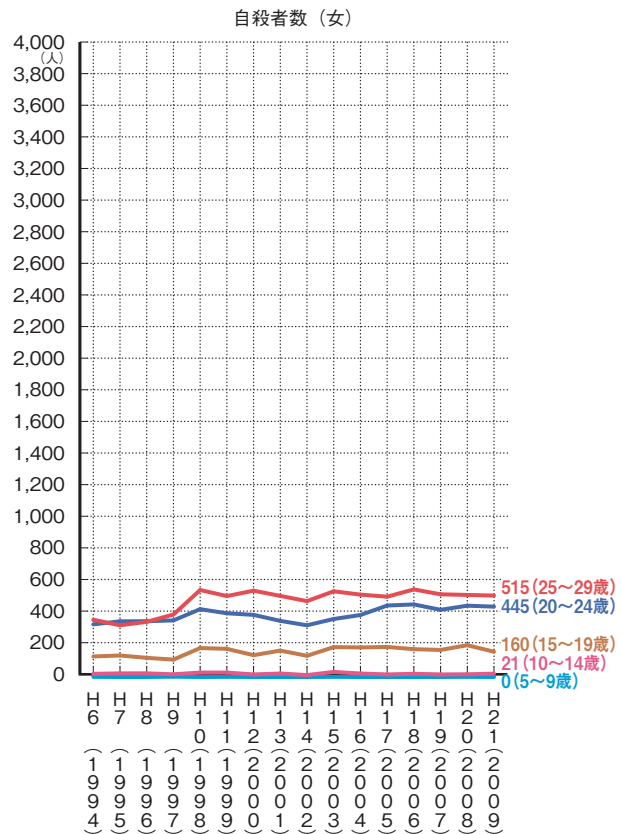
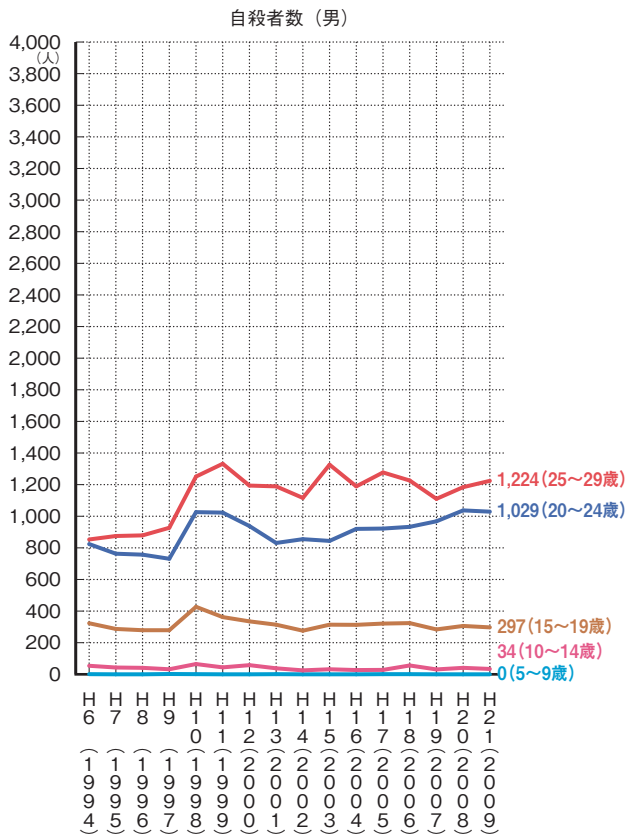
第1-7図 青少年（30歳未満）の自殺者数の推移と自殺者全体に占める割合



資料：厚生労働省「人口動態統計」より内閣府作成

第1-8図

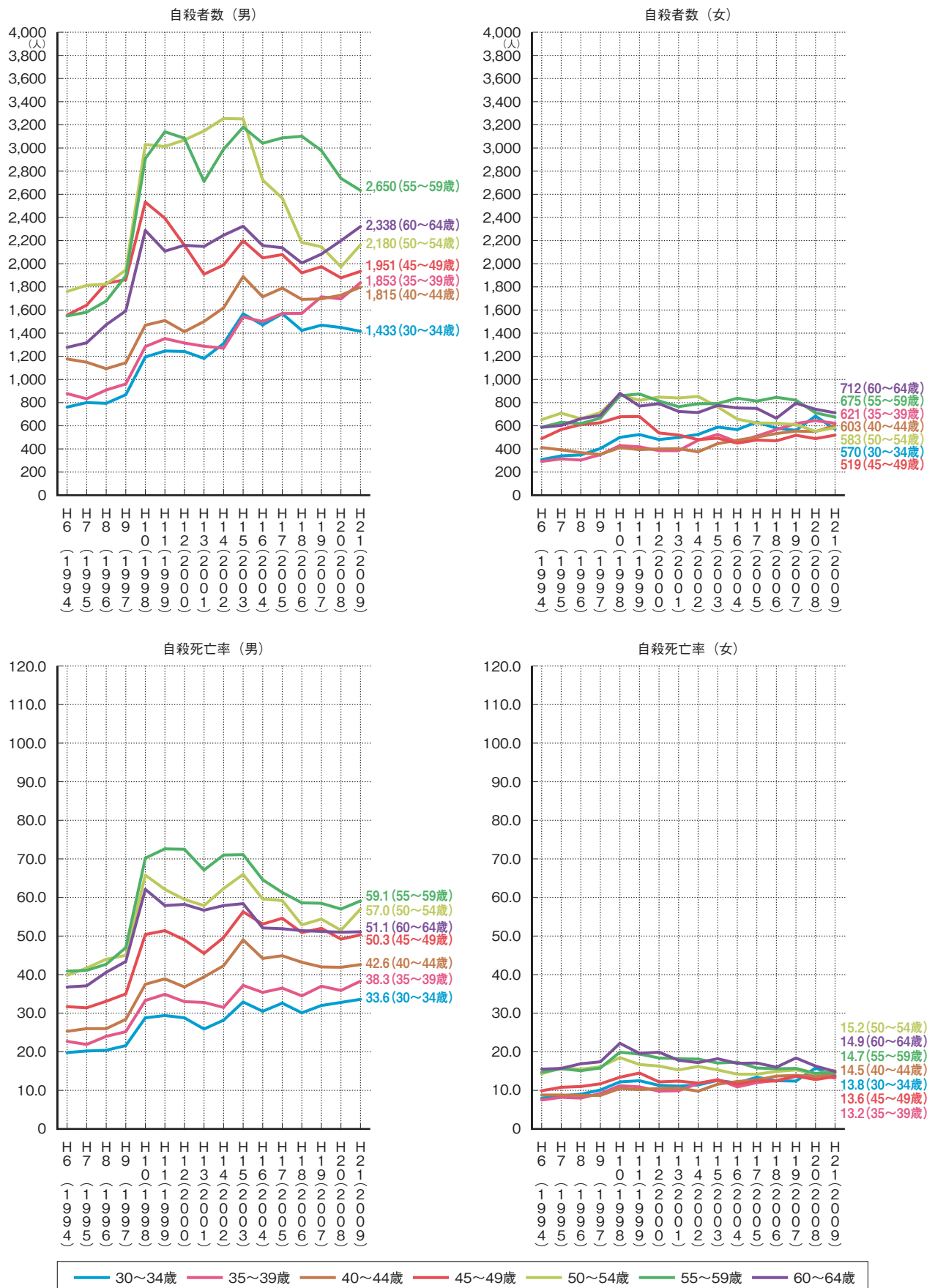
青少年（30歳未満）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移



— 5～9歳 — 10～14歳 — 15～19歳 — 20～24歳 — 25～29歳

資料：厚生労働省「人口動態統計」

第1-9図 中高年（30～64歳）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移



第1-10図

高齢者（65歳以上）の年齢階級別の自殺者数・自殺死亡率の推移

